

とある現実充足の仮想結婚空間

渡邊 剛（指導教員 八尾 廣）

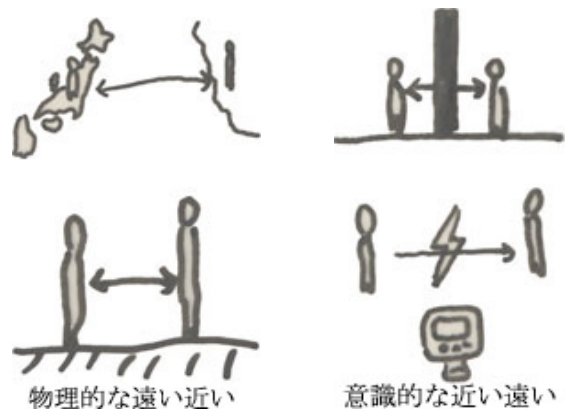
1 ネットの普及 匿名性 引きこもり

ウェブの世界から得られる莫大な知識・利益・喜びは世の中を飛躍的に豊かにしたが、ウェブ利用による被害・危険・損失の問題は常につきまとっている。その一つの問題として引きこもりがある。

『外に出ない人＝ダメな人』という固定概念とコミュニケーション至上主義社会が多くの引きこもりの社会復帰の妨げとなっている。引きこもりの特徴としてインターネット依存症とコミュニケーション障害を併発している場合が多い。ネットの世界の仮想世界は現実世界での生活が息苦しい人たちにとって非常に居心地のよい場所である。自由な言論ができ、発散できる場所である。それができるのはネット世界の匿名性が高い事が大きい。実際に存在する匿名性の某大型掲示板では多種多様なスレッドが日々立てられ毎日ものすごい量の討論、相談、雑談が行われている。おまけに現実世界では意味の伝わらないネットスラングが大量に発生し独自の文化を築いている。



彼らはネットの仮想世界の中では水を得た魚のようによくしゃべり（書き込み）得意分野についての知識も深い。自分のアバターを介していれば問題なく普通の人と同じようにしゃべれるのだ。彼らは物理的な意味で人と近づく事は苦手だが、意識的な意味で人と近づくのは得意なのだ。



2 秋葉原という街

秋葉原はその時々々に人々が求めるニーズに応えながら変化と発展を繰り返してきた街である。戦後、東京電機大学の学生がアルバイトでラジオを組み立て販売し大ヒットしたのを契機に高度経済成長と共に秋葉原に電気街の骨格ができていく。

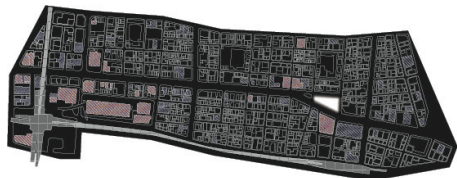
ラジオ→オーディオ→家電→パソコン→アニメ・ゲーム→メイド（家電の街→マルチメディア最先端の街→オタクの街）という風に街の様相を変えてきた秋葉原は引きこもりの聖地であったが、オタクの街と認識され始めたあたりからオタク文化が一部のマニアの物から次第に一般化、大衆化していきアキバ系という言葉も生まれた。マンガ、アニメが日本のポップカルチャーとして欧米諸国を中心に評価され秋葉原は『Akiba』として世界の若者が憧れる聖地となり、一般人から外人まで様々な種類の人が踏み入れるようになった。しかし秋葉原が引きこもりの聖地である事には変わりはない。



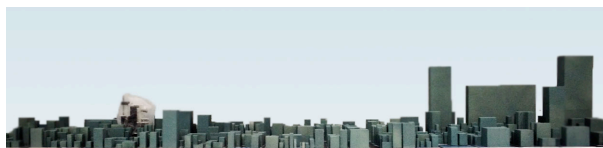
一步踏み入れると空気が変わる、メイドが歩いても違和感が無い、まるで仮想世界のような街である。

3 設計趣旨

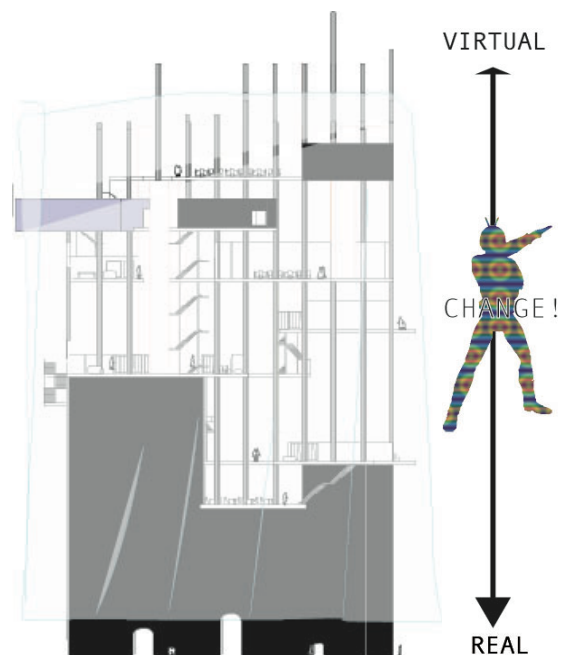
私は引きこもりの問題を解決したいとは思わない。彼らは今の日本に置いて必要悪だからだ。ただ、彼らや、秋葉原にいるいわゆるアキバ系のオタクたちに変化を起こして秋葉原を次の段階に昇華させるきっかけとなるような物を創りたいと思い設計を始めた。



そこで私は、仮想世界と現実世界の割合が反転してしまっている彼らにとって、さらに仮想のような空間である結婚式場を提案する。敷地は秋葉原の歩行者天国から突き当たり約1キロメートルの、秋葉原から物理的には遠いが意識的には近い所にある。



コンセプトは仮想結婚空間で、高さ90メートルの建物が下層から『REAL』『CHANGE』『VIRTUAL』と三つの部分に分かれており、REALゾーンには誰でも利用可能な施設が入っており、建物の上層に上につれ結婚式場の要素が強くなると共に、壁がなくなり、柱がなくなり、部屋が浮かびネットの中の仮想世界の無重力空間のようなVIRTUALゾーンへと変化していく。さらにこの結婚式場は秋葉原の虚構性にあやかって、新郎新婦や披露宴に出席する人々がCHANGEゾーンにてコスプレ衣装に仮装し、身も心も現実世界から離れ仮想世界に突入していく。



またここで行われる披露宴の様子は動画配信サイトにて生中継され、家にいる引きこもりの目にも届き、さらにコメント機能にて祝祭に参加する事が出来る。

日々行われる祝祭の空気を感じ、眺め、参加し彼らの中に結婚式という物が刷り込まれた時、秋葉原にオタクの街の次のベクトルが生まれる事を期待する。

